

きた まえ い せき
北の 前 遺 跡

(D区)

平成28年10月

宇都宮市教育委員会

序

宇都宮市の北西部、上戸祭付近は、釜川によって開けた低地を中心に田園風景が広がっていましたが、宅地化の進行、さらに宇都宮北道路の開通によって、その姿を大きく変えつつあります。この北の前遺跡に隣接する前田遺跡では、昭和62年～63年にかけて上戸祭小学校の建設に伴い、宇都宮市教育委員会によって記録保存のための発掘調査を実施し、古墳時代から平安時代の大規模な集落跡が確認されました。

北の前遺跡においても、過去の調査において古墳時代から平安時代にかけての集落跡が確認された他、中・近世の溝や掘立柱建物跡などが確認されています。

今回の調査は、有限会社あおいハウジングの宅地造成に伴い影響を受けることになった本遺跡の取り扱いにつきまして、事業者をはじめ、関係機関と協議の上、遺構の保存が行えない部分について、記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。調査の結果、古代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等とともに、中・近世の土坑等も確認することができ、北の前遺跡の集落変遷を知るうえで貴重な資料を得ることができました。

本報告書は、この成果をまとめたものであり、多くの方々がさまざまな方面でご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました関係各位、関係機関並びに終始ご協力いただきました地元関係者各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成28年10月

宇都宮市教育委員会

教育長 水越久夫

例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市上戸祭町字北の前に所在する「北の前遺跡（D区）」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、有限会社あおいハウジングによる宅地造成に伴うもので、同社の依頼により、宇都宮市教育委員会の指導の下、株式会社日本産業史研究所が実施した。
3. 調査は、平成28年6月20日～同年7月6日まで野外調査を実施し、その後同年10月20日まで整理・報告書作成作業を行った。
4. 野外調査は水野順敏が担当し、整理・報告書作成作業も行った。本書の執筆はI-1.を高橋慧、他は水野が行った。遺物整理・挿図作成・編集作業においては鈴木智子の協力を得、G-1の石斧の実測は柏崎広伸が行った。

5. 調査組織

調査指導・宇都宮市教育委員会文化課

調査主体者・株式会社日本産業史研究所

水越 久夫 教育長

菅間 裕二 代表取締役

松本 邦夫 文化課長

水野 順敏 調査担当者（日本考古学協会々員）

板倉 英伸 文化課長補佐

今平 利幸 文化課文化財保護グループ係長

高橋 慧 文化課文化財保護グループ

6. 調査記録及び出土遺物は宇都宮市教育委員会が保管する。
7. 野外調査から整理・報告書作成作業において下記の機関・各位よりご助力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する次第である。







栃木県教育委員会文化財課、(有)あおいハウジング、沼尾測量事務所、宇都宮市立上戸祭小学校、(株)塚田土建、(株)ダイショウ、佐藤聡子、別井千代子、梁木 誠、山下守昭 (敬称略、順不同)

8. 調査参加者

石川義夫、塩沢寿夫、田澤一二美、森千鶴子、渡辺重夫 (敬称略、順不同)

凡 例

1. 本遺跡名の略号は、U-KNM-Dで遺物の注記はこれによる。また、遺構の略号はSI（竪穴住居跡）、SB（掘立柱建物跡）、SK（土坑）、P（住居跡柱穴・掘立柱建物跡柱窟方）、D（住居跡内溝）、番号のみ（小穴）である。
2. 第2図は、今平昌子「北の前遺跡中・近世編」2001 栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団刊の第319図を複製加筆したものである。第3図は国土地理院発行の2万5千分の1地形図「大谷」、「宝積寺」、「宇都宮西部」、「宇都宮東部」を部分複製し加筆した。
3. 遺構実測図の縮尺は1/60を基本とし、カマドは1/30、遺物実測図は1/3に統一したが、写真図版は統一していない。
4. 遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図・断面図の水準線の数値は、海抜標高を示す。
5. 挿図の遺物番号は本文中及び写真図版の番号と合致する。写真図版は○-□の前が遺構番号、後が遺物番号である。
6. 遺構図面及び遺物図面で使用したスクリーントーンは以下の通りである。

 焼土  粘土  施釉陶器  炭化材  掘方・床下土坑  土器断面
の黒ベタは須恵器、土層注記のL（ルーム）、S（焼土）、C（炭化物）、N（粘土）、R（稜）、B（塊）を示す。

目 次

序

I はしがき

1. 調査に至る経緯	7
2. 遺跡の位置と環境	9
(1) 地理的環境	9
(2) 歴史的環境	9
3. 調査の経過と調査の方法	11
4. 基本層序	12

II 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡	13
2. 掘立柱建物跡・小穴	19
3. 土坑	20
4. 調査区内出土遺物	22

III 総括

1. 土地利用の変遷	25
2. 特徴ある遺構	26

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	第5表 小穴計測表
第2表 SI-1 出土遺物観察表	第6表 SK-1・2 出土遺物観察表
第3表 SI-2 出土遺物観察表	第7表 調査区内出土遺物観察表
第4表 SB-1 出土遺物観察表	

挿 図 目 次

第1図 試掘調査図 (本調査結果と合成) (1:400)	第7図 SI-1 カマド・出土遺物
第2図 調査区の位置と周辺の遺構分布図 (1:2,500)	第8図 SI-2・(B・D区) 合成図・出土遺物
第3図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1:25,000)	第9図 SI-3 カマド
第4図 基本土層図	第10図 SB-1・出土遺物、SK-1・2・出土遺物
第5図 調査区全体図 (1:200)	第11図 調査区内出土遺物
第6図 SI-1 (1) 炭化物出土状態・(2) 完掘・掘方	第12図 B・C・D地区遺構配置図

図版目次

- 図版1 A. 調査前近景(西より) B. 調査区全景(西より) C. 調査区全景(東より) D. 調査区西部(北より) E. SI-1完掘(西より) F. SI-1掘方(西より) G. SI-1炭化物1(西より)
H. SI-1炭化物2(西より)
- 図版2 A. SI-1中央部炭化物(西より) B. SI-1炭化物近景(東より) C. SI-1南北土層(西より)
D. SI-1東西土層(南より) E. SI-1カマド完掘(西より) F. SI-1カマド掘方(西より)
G. SI-1カマド南北土層(西より) H. SI-1カマド東西土層(南より)
- 図版3 A. SI-1遺物(Na2・6・5より)(東より) B. SI-1遺物Na3(南西より) C. SI-1北東隅
床下土層(北より) D. SI-1北東隅床下(北西より) E. SI-2完掘(南より) F. SI-2完掘(北
より) G. SI-2掘方(南より) H. SI-2掘方(北より)
- 図版4 A. SI-2南北土層(東より) B. SI-3カマド確認時(北より) C. SI-3カマド南北土層(西より)
D. SI-3カマド東西土層(北より) E. SB-1完掘(北より) F. SB-1・P-1土層(南より)
G. SB-1・P-2土層(南より) H. SB-1・P-4土層(西より)
- 図版5 A. SK-1完掘(東より) B. SK-1東西土層(南より) C. SK-2東西土層(南より)
D. SK-2完掘(南より) E. 基本土層1(東より) F. 基本土層2(北より) G. 基本土層3(西
より) H. 作業風景(西より)
- 図版6 SI-1・2出土遺物
- 図版7 調査区内出土遺物

I はしがき

1. 調査に至る経緯

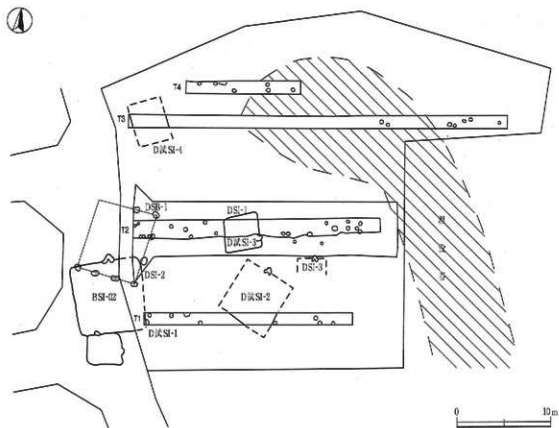
平成 28 年 2 月 1 日付で、有限会社あおいハウジングより、上戸祭町 262-1 の北の前遺跡（県遺跡番号 2260）での宅地造成に伴い、文化財保護法第 93 条の届出が提出された。2 月 2 日付で市教委文化課から県教育委員会文化財課（以下県文化財課）へ進達した。

今回の調査箇所は、昭和 62 年～63 年に上戸祭小学校建設に伴う発掘調査が行われ、古墳～平安時代の大規模な集落跡が確認された前田遺跡に隣接しているため、遺構が確認される可能性が高く、県文化財課より確認調査が必要である旨の指示が 2 月 8 日付であったため、有限会社あおいハウジングと協議し、確認調査を実施することとなった。

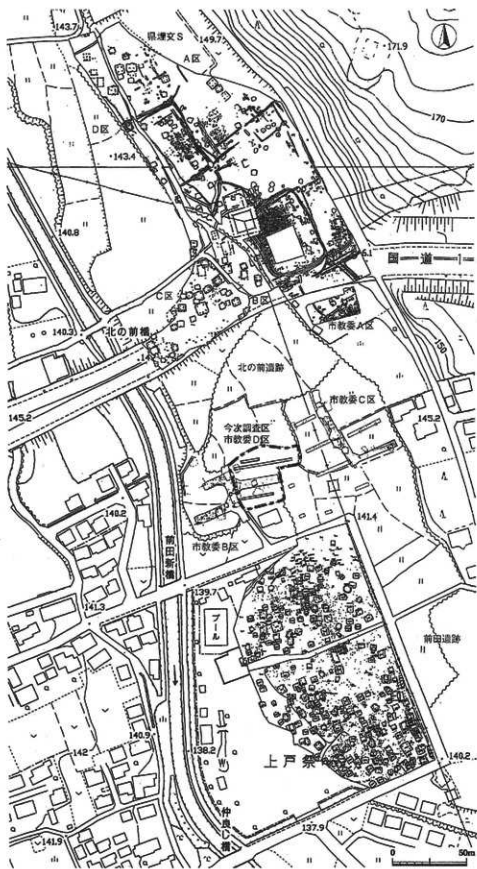
確認調査は、3 月 16 日・17 日の計 2 日実施した。この際には、試掘溝を 4 本設定し（T-1～T-4）、深さ 80～150cm の表土部分を重機により掘り下げ遺構の有無を確認した。調査の結果、堅穴住居跡 4 軒が確認され、土器片数点が出土したほか、土坑 1 基及び柱穴 42 基が確認された。

この調査結果をふまえて、有限会社あおいハウジングと協議した結果、開発区域内の道路予定地の約 210m² について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、株式会社日本竊業史研究所が主体となり、現地における発掘調査及び発掘調査報告書の作成を担当することとなった。調査期間は、平成 28 年 6 月 20 日～7 月 6 日である。この間、7 月 1 日には、市教委が立会いを行い、7 月 6 日には野外調査はすべて終了となった。



第 1 図 試掘調査図（本調査結果と合成）（1：400）



第2図 調査区の位置と周辺の遺構分布図 (1:2,500)

2. 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

遺跡は栃木県宇都宮市上戸祭町字北の前に所在し、市街地の北西約4kmの水田地帯に立地する。

宇都宮市は栃木県の中央部に位置するとともに、関東平野の北端にあたり、日光山地を源とする鬼怒川・大谷川・黒川などが形成する複合扇状地の扇端部に立地している。この為山地から平野部への転換点にあたり、市域の北～北西部は山地が見られるが、南側では平地が広がっている。

また、市域を南流する鬼怒川・田川・姿川などによって、岡本台地・田原台地・宝木台地などが形成されている。旧上河内町地内の高館山付近より市内中心部の八幡山公園に向かって標高160～200m程の宇都宮丘陵が南北に延びており、この宇都宮丘陵は市内瓦谷町付近で一時的に東流する田川によって北部と南部に分断されている。宇都宮丘陵南部は東側に田川、西側に釜川が南流しており、丘陵周辺には両者によって形成された田川低地が広がっている。この丘陵の基盤は第三紀中新世の凝灰岩や砂岩などから成り、丘陵上には関東ローム層が堆積している。基盤の凝灰岩は比較的軟質で、長岡石と呼ばれ、かつては建築材として利用されていた。付近には随所露頭が見られ、「県指定史跡長岡百穴古墳」もこの岩盤に掘り込まれていたものである。

本遺跡はこの宇都宮丘陵南部の西側に所在し、丘陵裾部から釜川右岸に広がる緩斜面に立地している。遺跡は過去の調査成果から南北約350m、東西約150mと広大な範囲を占めると判断されるが、今次調査区はその南東端の標高143m程の斜面地に位置する。市道を隔てた南西に市立上戸祭小学校が隣接し、周辺は宅地化が進んでいるものの、調査区付近は水田及び畑地として利用されている。

交通的にはJR東日本宇都宮駅の北北西約4.3km、東武鉄道宇都宮駅の北方約3.6kmに位置し、調査区の西約400mを国道119号線（日光街道）が南北に通り、北方約60mには宇都宮環状線が東西に通っている。また、この環状線より分かれて北に向かう自動車専用道路である宇都宮北道路の分岐点が所在する。

なお、この宇都宮環状線及び宇都宮北道路の建設に伴い、平成3～5年度にわたって「北の前遺跡」の発掘調査が実施された。約26,000㎡を調査し、縄文時代から中・近世にわたる遺構・遺物が確認された（後述）。

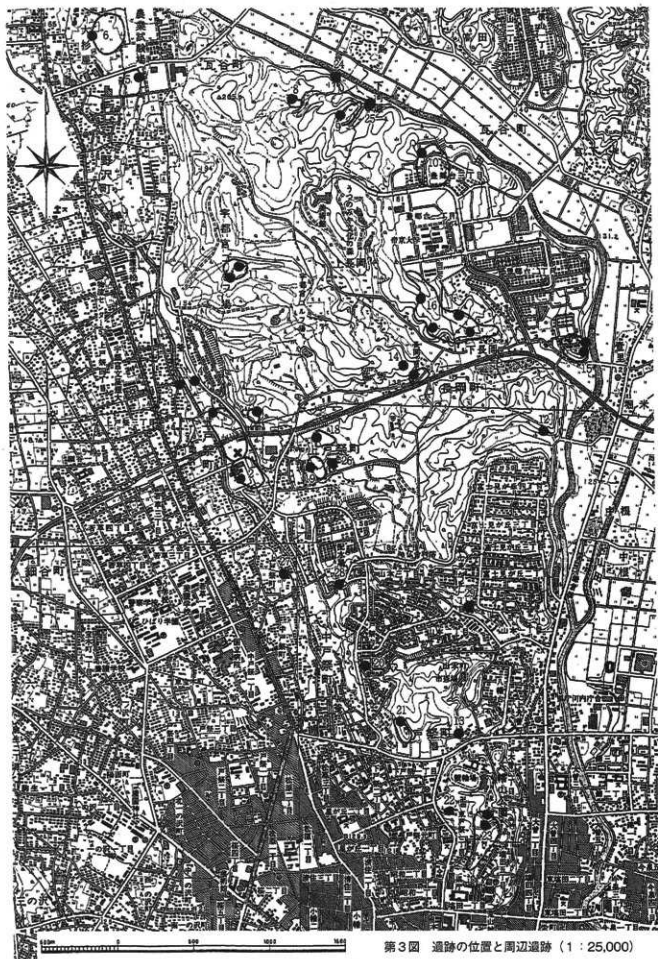
さらに、南側に隣接する上戸祭小学校の建設に際しては「前田遺跡」が約15,000㎡調査され、密度の高い古代の集落跡が確認されている（後述）。本調査区とこの前田遺跡は市道を隔てて隣接するが、両者の間には釜川水系の小支谷（埋没谷）が存在しており、これによって両者を区分する。

(2) 歴史的環境

本遺跡の周辺には第3図、第1表に示す如く多数の遺跡の存在が知られている。

遺跡の北方約3.5kmには弥生時代中期の標準遺跡として著名な野沢遺跡（6）がある。また、丘陵上には県指定史跡の大塚古墳を主墳とする大塚古墳群（19）、市指定史跡の瓦塚古墳群（16）、谷口山古墳群（15）、御蔵山古墳を含む八幡山古墳群（23）など多数の古墳群の存在が知られる。さらに、東方約1.3kmには県内最大級の横穴墓群として知られる県指定史跡長岡百穴古墳（14）が凝灰岩の露頭部分に穿たれている。

該期の集落跡は丘陵裾と東側の田川沿い、もしくは西側の釜川沿いに分布する。特に調査区の南に隣接する前田遺跡（2）は30,000㎡程の広大な遺跡のうち、約15,000㎡が調査され、古墳時代後期～平安時代にわたる堅穴住居跡161軒、掘立柱建物跡98棟などが確認された。また、北の前遺跡（1）においても、北方約80～300mの道路建設に伴う県埋蔵文化財センターの調査で古墳～平安時代の堅穴住居跡88軒、掘立柱



第3図 遺跡の位置と周辺遺跡 (1 : 25,000)

建物跡15棟の他、膨大な数の中・近世の遺構・遺物が確認された。さらに、今回の調査区から北東約90mの地点での共同住宅建設に伴う市教委による調査(A区)では古代の竪穴住居跡3軒の他、中・近世の遺構・遺物が確認された。また、西側隣接地の宅地造成に伴う市教委による調査(B区)では古代の竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡5棟などが確認され、縄文時代後期～中・近世にわたる遺物が出土した。東方約45mの宅地造成に伴う調査(C区)でも、古代の竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡2棟、中・近世の溝跡、地下式坑などが確認された。

なお、南方約800mの釜川右岸に根瓦瓦窯跡群(27)、南南東約1.1kmの同左岸に水道山瓦窯跡群(28)、東方約500mに上戸祭大塚瓦窯跡(26)などの瓦窯跡が分布する。さらに、田川右岸の北方約2.3～2.5kmには広表窯跡(24)、欠の上窯跡(25)など須恵器の窯跡が知られ、これらは総称して宇都宮窯跡群と呼ばれている。前記の前田遺跡においては瓦窯操業時期に集落が拡大したと考えられ、大塚瓦窯跡と同一の用具文字の瓦が出土するなど、両者の密接な関係が窺える。また、この遺跡からは県下でも類例の少ない新羅土器や新羅系緑釉陶器が出土しており特異な存在である。

北の前遺跡においても、道路建設に伴う調査、前々回・前回の宅地造成に伴う調査(B・C区)及び今次調査区(D区)より多数の瓦が出土しており関連性が想起されるが、こちらは主に瓦窯の操業停止後の竪穴より出土している。

3. 調査の経過と調査の方法

前述の如く、今回の調査は有限会社あおいハウジングによる宅地造成に伴うものである。

調査は平成28年6月12日より準備に入り、6月20日より重機による表土除去に着手した。翌21日から作業員が加わり、仮設施設の設営・遺構確認作業に入る。試掘調査では調査区内に2軒の竪穴住居跡が確認されていたが、遺構確認作業の結果、合計3軒の竪穴住居跡が確認された。この他掘立柱建物跡や土坑なども認められた。確認した遺構は、基本的には竪穴住居跡は十文字、土坑、小穴は半截による土層の観察・記録の後、完掘して写真・実測の記録を行った。その後、竪穴住居跡は構築・建て替への追求の為、掘方まで掘り下げて記録を行った。写真記録は、35mm判の白黒・カラーリバーサルフィルムを使用、デジタルカメラで補足した。実測はトータルステーションで計測し、人手で方眼紙に記入、調査区全域を縮尺20分の1で

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	市番号	県番号	時期	種別	番号	遺跡名	市番号	県番号	時期	種別
1	北の前遺跡	465	2260	古～中・近	集落跡	15	谷口山古墳群	55	2353	古	古墳
2	前田遺跡	365	2261	古～奈	集落跡	16	瓦塚古墳群	54	2354	古	古墳
3	北原遺跡	49	2257	縄・古～平	集落跡	17	長岡百穴古墳	53	2357	古	横穴墓
4	上戸祭中ノ鳥遺跡	50	2258	縄・古	集落跡	18	大ジノ古墳群	58	2361	古	古墳
5	野沢石塚遺跡	31	2241	縄・奈	集落跡	19	大塚古墳群	57	2359	古	古墳
6	野沢遺跡	30	2239	縄・古	集落跡	20	山本山古墳群	68	3248	古	古墳
7	追越遺跡	464	2259	縄	集落跡	21	戸祭山兜塚古墳群	344	3249	古	古墳
8	桜塚遺跡	38	2335	縄・古	集落跡	22	禅雲寺境内古墳	345	3252	古	古墳
9	欠の上遺跡	39	2336	縄・古	集落跡	23	八幡山古墳群(御藏山)	346	3253	古	古墳
10	瓦塚日満北久保遺跡	40	2339	縄・古	集落跡	24	広表窯跡	427	2334	奈・平	窯跡
11	宇都宮ゴルフ場遺跡	48	2251	縄・古	集落跡	25	欠の上窯跡	426	2337	奈・平	窯跡
12	田向遺跡	63	2365	縄・古	集落跡	26	上戸祭大塚瓦窯跡	366	2360	奈	窯跡
13	戸祭免田遺跡	71	3250	古	集落跡	27	根河原瓦窯跡群	64	7139	奈	窯跡
14	百穴表遺跡	52	2356	縄・古	集落跡	28	水道山瓦窯跡群	65	3245	奈	窯跡
						29	入畑窯跡	66	3246	江～明	窯跡

(市番号は宇都宮市遺跡地図の番号と一致する)

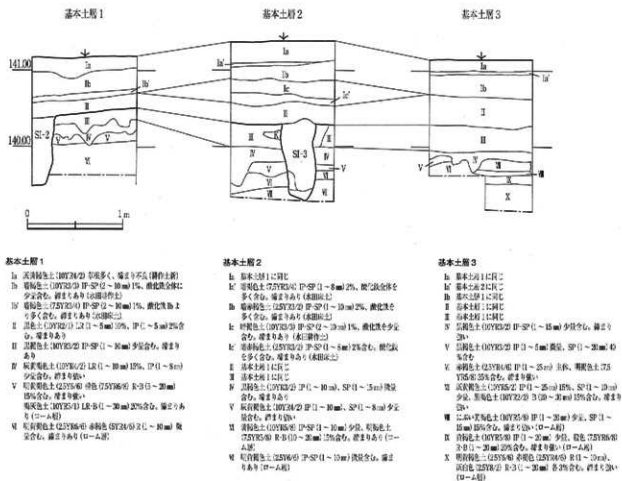
実測した。全体図はこれを縮小して作成した。カマドは縮尺10分の1で実測した。調査区画の設定は、公共座標（世界測地系第IX座標系）による10m方眼を設定した。調査区南西隅に原点を置き、X軸をローマ数字、Y軸をアルファベットで示した。原点の座標値はX = 65630.00、Y = 30100.00である。

調査作業は同年7月6日まで継続し、この間6月24日に市教委による中間立ち会いを受け、7月1日には市教委及び事業主による終了立ち会いを受けた。その後、補足記録を行い、7月6日より埋め戻し、仮設施設・器材の撤去を行い7月7日にすべての野外作業を終了した。当初の調査対象面積は約210㎡であったが、計画変更等により最終的な調査面積は約180㎡となった。

整理・報告書作成作業のうち、遺物の洗浄・注記・接合等は野外調査の着手後より並行して実施した。その他の作業は野外調査終了後の7月上旬より開始し、同年10月20日に全ての作業を終了した。

4. 基本層序

今次調査区は北の前遺跡の南端に位置し、南に隣接する前田遺跡と区分する埋没谷の存在が想定されている。さらに、西隣のB区と東側のC区の間には前記の埋没谷から派生した別の埋没谷の存在が推定され、調査区はその西縁にあたる。この為、調査区の西端では現地表面下50～60cm程で遺構確認面に至るが、中央～東端では100～130cm程となる。また、東寄りでは今市(IP)、七本桜(SP)軽石の堆積が認められるものの、西側には認められなかった。以下に調査区東端、中央、西端の3か所を图示した。



第4図 基本土層図

II 遺構と遺物

今次調査区で確認された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡2軒、時期不明の竪穴住居跡（カマドの煙道部）1軒、古代の掘立柱建物跡1棟、土坑1基、小穴31基（時期不明含む）、中世の土坑1基などである。道路部分のみという調査区の制約から、全体を調査し得た住居跡はSI-1が1軒のみで、他は部分的な調査であった。SI-2は西に隣接するB区SI-02の北東隅と判断され、SI-3はカマドの煙道部以外は全て調査区外となっていた。また、SB-1は北辺と東辺の一部を確認したに過ぎないが、B区SI-02の実測図との合成により3×3間の建物跡と判明するに至った。遺物は縄文時代の石器、古墳時代～平安時代の土師器、須恵器、灰軸陶器、瓦、中世の土師質土器土鍋などが出土した。

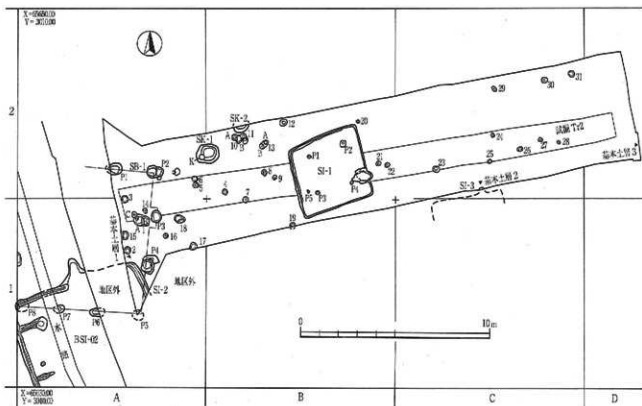
1. 竪穴住居跡

SI-1

遺構（第6・7図、図版1・2）

調査区のほぼ中央、1・2B区に跨って所在する。東約6mにSI-3、南西約9mにSI-2が隣接する。重複関係は無い。

平面形は、東西長約39m、南北長は東辺で39m、西辺が37mと僅かに狭い方形であった。主軸方位はN-74°-Eを示す。壁は現存高25～30cmでほぼ直立する。北辺と西辺の壁下には幅9～12cm、深さ4cm程の壁溝が設けられていた。浅い溝であることから、本来はカマドを除く全体に設けられていたものを、床面確認の際に見落とした可能性も否めない。床面は粗掘りの後ローム粒・塊主体の土で整地したもので、平坦



第5図 調査区全体図(1:200)

に堅く締まっていた。なお、北西隅を除く三隅には床下の掘り込みが認められ、北東隅のものは深さ35cmで土坑状であった。中央部の床面直上から各壁際にかけて、多量の炭化材と焼土が遺存し、火災住居と判断される。遺存した炭化材は径10cm前後の丸太状のものが多く、所々に屋根材と思われる茅状のものも認められた。柱穴はP1～P4の4基認められ、径25～35cm、深さ40～82cmであった。柱は床面の痕跡から径20cm程と推定される。貯蔵穴は認められず、カマドと対面の西壁際に確認されたP5は出入口の施設と思われる。

カマドは東壁の中央より南寄りに灰白色粘土で築かれており、煙道は壁を幅40cm、奥行き20cmの台形状に切り込み設けられていた。火災の後の移転に際しての儀礼的破崩を行ったものか、遺存状態が悪く、崩れたカマド用材の中にも炭化材の一部が認められた。また、凝灰岩や土器等の補強材の存在は確認されなかった。

埋積土は4層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

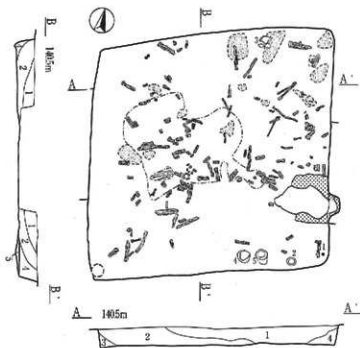
遺物（第7図、図版6、第2表）

出土量は少ないものの、カマド右脇の南東部の壁際より完形の土師器環（2）、甗（5）、60%程が遺存する大型鉢（4）、北東部の壁際からもほぼ完形に復元し得る土師器環（3）が出土した。

第2表 SI-1 出土遺物観察表

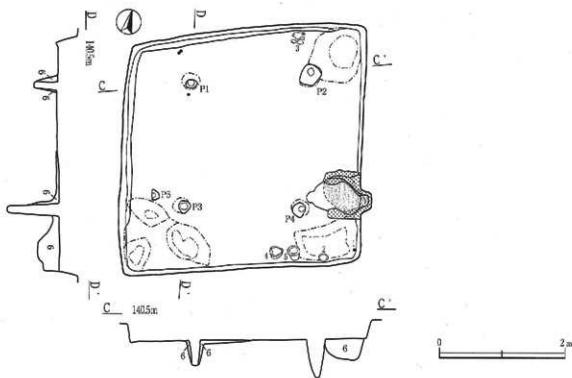
〔 〕推定値 []現存量

No.	種別	大きさ(cm) 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	備考
	器種					
1-1	土師器 環	口径 (11.0) 器高 [4.2] 底径 —	口辺・体部 30%	口辺部内・外面横ナデ仕上げ、内面ミガキ後ウルシ仕上げ、体・底部外面ヘラ削り後粗いミガキ	胎土 焼成 色調 黒褐色 (10YR3/1.3/2)	No7
1-2	土師器 環	口径 12.6 器高 6.0 底径 —	完形	口辺部内・外面横ナデ仕上げ、内面ミガキ後ウルシ仕上げ、体・底部外面ヘラ削り後粗いミガキ	胎土 焼成 色調 普通 黒褐色 (10YR2/2)、にぶい褐色 (7.5YR5/3)	No3 二次被熱
1-3	土師器 環	口径 16.4 器高 5.5 底径 —	口辺・底部 95%	口辺部内・外面横ナデ仕上げ、内面ミガキ後ウルシ仕上げ、体・底部外面ヘラ削り後粗いミガキ	胎土 焼成 色調 普通 黒褐色 (7.5YR3/1)、にぶい黄褐色 (10YR5/3)	No8 二次被熱
1-4	土師器 鉢	口径 15.0 器高 17.9 底径 8.4	口辺～底部 60%	輪轆み、口辺部内・外面横ナデ仕上げ、体・底部外面ヘラ削り、同内面ヘラナデ、外面全体にミガキ、内面にミガキ・ウルシ仕上げの可能性が高いが、二次被熱で詳細は不詳	胎土 焼成 色調 普通 内 褐色 (10YR6/6)、黒褐色 (10YR2/2) 外 明赤褐色 (5YR5/8)、褐灰色 (5YR4/2)	No1 二次被熱で器面荒れる
1-5	土師器 甗	口径 20.5 器高 23.1 底径 10.2	完形	輪轆み、口辺部内・外面横ナデ仕上げ、体部外面縦にヘラ削り、口辺部外面、体部内・外面縦、口辺部内面横にヘラミガキ、口辺部外面と体部内面の下半はミガキがまばら	胎土 焼成 色調 普通 黒色 (10YR2/1)、黒褐色 (10YR3/2)、褐色 (5YR6/8)	No2 二次被熱
1-6	土師器 類	口径 — 器高 — 底径 (9.7)	体・底部断片	輪轆み、体・底部外面ヘラ削り、同内面ヘラナデ、底部外面ヘラミガキ	胎土 焼成 色調 普通 内 にぶい黄褐色 (10YR7/4) 外 褐色 (7.5YR6/6)、灰褐色 (7.5YR4/2)	埋積土1区
1-7	須恵器 類	口径 — 器高 — 底径 —	体部断片	ロクロ整形、外面が平行叩きで下位にヘラ削り、内面ヘラナデ	胎土 焼成 色調 普通 内 灰色 (N7/0) 外 灰色 (N6/0)	埋積土1区 内面に降灰(自然礫)を認める。上・下の割れ口が磨減、研磨等に再利用か?二次被熱で器面荒れる



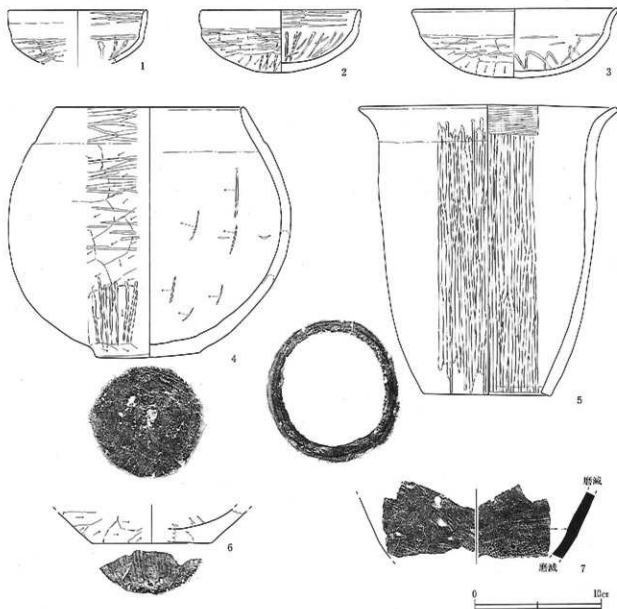
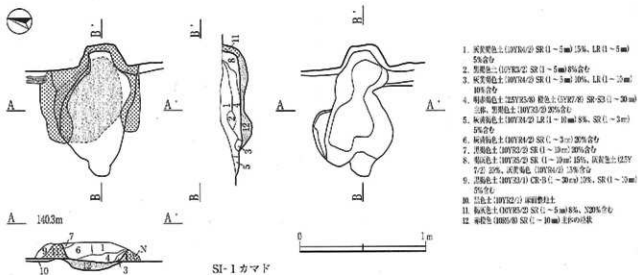
1. 黒褐色土 (0YR2/2) 厚 0.2~1.0m 層、炭化物少量を含む。層厚 9.5m
2. 黒褐色土 (0YR2/2) 薄褐色土 (0YR5/6) (1~3cm) 層厚 1.5m 層、SP (1~3cm) 少量、炭化物 0.2~0.4% 含む。層厚 9.5m
3. 黒色土 (0YR2/1) 黒褐色土 (0YR5/6) 厚 0.2~0.5m 層、SP SP 少量を含む。層厚 9.5m
4. 黒色土 (0YR2/1) 黒褐色土 (0YR5/6) 厚 0.2~0.5m 層、SP (2cm) 少量を含む。層厚 9.5m
5. 黒色土 (0YR2/1) SP (2~4cm) 少量を含む。層厚 9.5m
6. 暗褐色土 (0YR3/4) 1.5~3.0~10.0m 層厚を含む。層厚 9.5m

SI-1 (1) 炭化物出土状態



SI-1 (2) 完掘・掘方

第6図 SI-1 (1) 炭化物出土状態・(2) 完掘・掘方



第7図 SI-1 カマド・出土遺物

SI-2

遺構 (第8図、図版3・4)

調査区南東隅、1A区に所在し、調査区内には東西長約1m、南北長2.7m程が遺存したに過ぎない。西に隣接するB区SI-02の図面と合成した結果、その北東隅と判明し、また、調査区内での南端部に部分的に認められた掘り込みはSB-1の柱掘方と判断され、これに切られていた。B区では南辺がSI-04に切られていた。東約9mにD区SI-1、南西約4.5mにB区SI-03が隣接する。以下はB・D区を合わせ記す。

平面形・規模は、東西長約7.4m、南北長約7.65mのほぼ方形で、北東・北西隅は僅かに丸味を帯びる。主軸方位はN-18°-Eを示す。壁は現存高27~60cm、概ね直立するが、一部内湾する部分も認められた。壁下には幅20~25cm、深さ10cm程の壁溝が設けられており、カマド部分を除き圍繞していたと考えられる。西辺の壁溝より内(東)側に向かって延びる間仕切溝(D1~D3)が認められ、D1・3は主柱穴P1・2に連なり、D2は壁から90cm程延びて止まる。D1・3は掘り直しが認められた。床面は粗掘り後ローム粒・塊主体の土で整地されていた。ほぼ平坦に堅く締まっていたが、全体的に斜面上方の北より下方の南に向かって僅かに下降していた。北東隅では南北長70cm、深さ25cm程の掘り込みが認められた。当初は貯蔵穴かと思われたが、底面の状態や埋積土から床下の掘り込みと判断した。柱穴はP1・2が主柱穴で、径70cm、深さ95cm程、本来は4本柱と考えられる。柱は床面の痕跡から径18cm程と推定される。P7は出入口施設と思われる。カマドは北辺の中央を幅約1m、奥行き約1.2mの逆U字状に切り込み、灰白色粘土で築かれていた。また、その手前には焚口扉部の石材と見られる板状の凝灰岩が落下していた。しかし、これを支えるべき門柱状の石材は認められなかった。なお、このカマドの焚口より約60cm手前に、柱状の石材の基部が遺存しており、古いカマドの痕跡と推定された。

埋積土は6層に分けられ、自然埋没と考えられる。

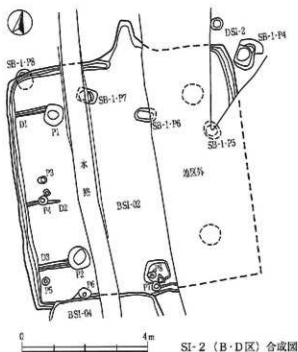
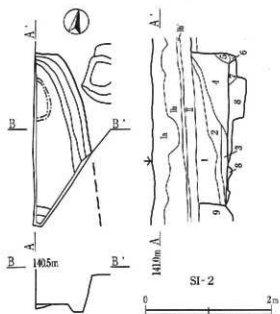
遺物 (第8図、図版6、第3表)

今次調査区での遺物は非常に少なく小片が主体であったが、B区の調査では完形の坏や高坏、鉢などが出土している。今次出土の中で形状の判るものを掲載した。土師器坏(1~3)・高坏(4・5)がある。

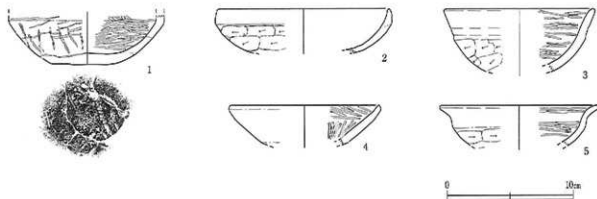
第3表 SI-2出土遺物観察表

()推定値 []現存値

No.	種別 器種	大きさ(cm) 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	備考
2-1	土師器 坏	口径 一 器高 [3.9] 底径 5.4	体・底部 60%	口辺部内・外面横ナテ仕上げ、内 面ミガキ後ウルシ仕上げ、体・底 部外面ナテ後粗いミガキ、外面 粘土継ぎ上げ痕目立つ	胎土 焼成 色調 砂粒混、白色砂粒目立つ 普通 内 ぶい黄褐色(10YR6/4) 外 黒色(N2/0)、灰青褐色 (10YR4/2)	埋積土 二次焼熱でウル シ消失、変色
2-2	土師器 坏	口径 (13.7) 器高 [3.5] 底径 一	口辺・体部 断片	内面全体と口辺部外面横ナテ仕 上げ、体部外面ヘラ削り	胎土 焼成 色調 砂粒混、白色砂粒目立つ 普通 内 ぶい黄褐色(10YR7/4) 外 橙色(7.5YR6/6)	埋積土
2-3	土師器 坏	口径 [11.8] 器高 5.0 底径 一	口辺・体部 断片	口辺部内・外面横ナテ仕上げ、内 面ミガキ後ウルシ仕上げ、体部 外面ヘラ削り	胎土 焼成 色調 砂粒混、褐色粒含む 普通 内 ぶい黄褐色(10YR7/4) 外 橙色(7.5YR6/6)	埋積土
2-4	土師器 高坏?	口径 (12.0) 器高 [3.2] 底径 一	口辺・体部 断片	口辺部内・外面横ナテ仕上げ、内 面ミガキ後黒色処理、口辺・体部 外面粗い横ナテ	胎土 焼成 色調 細砂粒混、白色砂粒目立つ 普通 内 黒色(10YR2/1) 外 褐灰色(10YR4/1)、 ぶい黄褐色(10YR7/3)	埋積土
2-5	土師器 高坏?	口径 (12.6) 器高 [3.2] 底径 一	口辺・体部 断片	口辺部内・外面横ナテ仕上げ、内 面ミガキ後ウルシ仕上げ、体部 外面ヘラ削り	胎土 焼成 色調 砂粒混、白色砂粒目立つ 普通 内 黒褐色(10YR2/2)、黒 色(10YR2/1) 外 黒褐色(7.5YR3/2)	埋積土



1. 黑土 (OYK2) 壁 (1) - 5m x 5m x 15cm 厚 2% 分, 壁厚 1.5m
2. 黑土 (OYK2) 壁 (1) - 10m x 5m x 5cm 厚 2% 分, 壁厚 1.5m
3. 黑土 (OYK2) 壁 (SP) - 2m x 2% 分, 壁厚 1.5m
4. 黑土 (OYK2) 壁 (1) - 6m x 5m x 10cm 厚 2% 分, CE 壁 - 4m x 2% 分, 壁厚 1.5m
5. 黑土 (OYK2) 壁 (1) - 6m x 5m x 10cm 厚 2% 分, 壁厚 1.5m
6. 黑土 (OYK2) 壁 (1) - 6m x 5m x 10cm 厚 2% 分, 壁厚 1.5m
7. 黑土 (OYK2) 壁 (1) - 6m x 5m x 10cm 厚 2% 分, 壁厚 1.5m
8. 黑土 (OYK2) 壁 (1) - 6m x 5m x 10cm 厚 2% 分, 壁厚 1.5m
9. 黑土 (OYK2) 壁 (1) - 6m x 5m x 10cm 厚 2% 分, 壁厚 1.5m



第8图 SI-2·(B·D区)合成图·出土遗物

SI-3

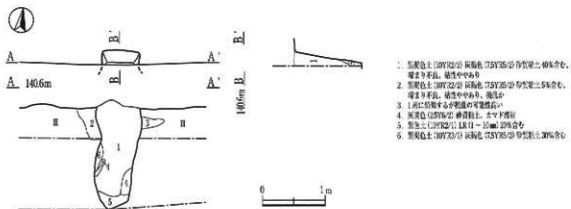
遺構 (第9図、図版4)

調査区の東寄り、2B区に所在し、調査区内ではカマドの煙道先端部を確認したのみで、他の大部分は南側の調査区外にある。西約6mにSI-1が隣接する。

したがって、堅穴はおろかカマドの規模・形状も明確にし難い。なお、調査区内の状況は、東西長30cm、現存南北長12cm、土層観察による上端から煙道底面まで80cm程である。先端部は僅かに外傾する。

埋積土は6層に分けられるが、第2・3層は攪乱と考えられ、構築材の粘土が被熱で変色したと見られる土を多量に含む第1層が主体で、下端にカーボン主体の第5層が認められた。

遺物の出土は無かった。



第9図 SI-3カマド

2. 掘立柱建物跡・小穴

調査区内より30基程の小穴を確認したが、建物跡として捉えられたのはSB-1が1棟のみである。他は計測値を表記した(第5表)。

SB-1

遺構 (第10図、図版4)

調査区西端の1・2A区に跨って所在する。調査区内においては北辺1間、東辺2間を確認したに過ぎなかったが、B区のSI-02の実測図と合成の結果、B区SI-02の床面上に認められた小穴や今次調査区のSI-2南端部に一部が見られた掘り込みも本跡の柱掘方と考えられ、3×3間の建物跡と推定するに至った。B・D区に跨って所在し、南辺全体がSI-2(B区SI-02を含む)内にあり、これを切る。また、P1・2・4に柱掘方の重複が認められることから、建て替への可能性も否めない。

平面形・規模は、桁行総長が東辺で7.5m、柱間は北より2.4+2.4+2.7、梁間総長は南辺で約6.5m、柱間は東より2.3+2.1+2.1のほぼ等間隔であった。棟方位はN-2°-Eを示す。柱掘方は径60~80cmの楕円形、深さ15~50cmと様々である。また、掘方底面の比高が北辺に比べ南辺の方が30~40cm低い。これは地山面の傾斜に加え、南辺はすべての柱掘方がSI-2の埋土中になることから、強度を考慮して変えたものと推察される。柱の太さは土層観察から径20cm程と思われる。

遺物（第10図、第4表）

柱掘方内より土師器、須恵器の小片が少量出土したが、図示し得たのは土師器坏（1）、須恵器壺（2）の2点である。また、P1より出土の須恵器蓋と同一個体と見られるのが調査区内出土遺物のG-3である。

第4表 SB-1出土遺物観察表

()推定値 []現存値

No.	種別 器種	大きさ(cm)		遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調		備考
		口径	高さ・底径					
B1-1	土師器 坏	口径 器高 底径	— — —	口辺・体部 断片	口辺部内・外面横ナア仕上げ、体部内面ナア、体部外面ヘラ削りで胎土紐巻き上げ痕目立つ、内面全体と口辺部外面ウシ仕上げ	胎土 焼成 色調	粗砂粒混 普通 内 暗褐色 (10YR3/3) 外 黒褐色 (10YR3/2)、褐色 (7.5YR4/4)	P2 粗粒土
B1-2	須恵器 壺?	口径 器高 底径	— — —	口辺部断片	ロクロ整形、外面ロクロ目が明顯	胎土 焼成 色調	細砂粒混、雲母細粒目立つ ややあまい 灰黄色 (2.5Y7/2)	P2 粗粒土 新治産?

第5表 小穴計測表

単位 cm ()推定値 []現存値

No.	短径	長径	深さ	形状	備考	No.	短径	長径	深さ	形状	備考
1a	58	[60]	19	—	1AGr, 1bを切りICに切られる、土師器壺	15	35	40	12	楕円	1AGr
1b	45	50	21	円	1AGr, 1aに切られる	16	18	24	12	楕円	1AGr
1c	[26]	30	25	円?	1AGr, 1aを切る	17	[28]	34	19	円?	1AGr
2	36	37	49	円	1AGr	18	38	53	17	楕円	1AGr
3	30	30	54	円	1・2AGr、土師器坏・壺	19	[29]	[35]	26	円?	2AGr
4	27	27	33	円	2BGr、須恵器蓋	20	16	19	20	円	2BGr
5	26	28	38	方	2AGr	21	23	25	29	円	2BGr
6	28	32	12	方	2AGr	22	23	25	29	円	2BGr
7	30	30	27	円	1・2BGr	23	30	33	51	円	2CGr
8	27	30	31	円	2BGr	24	16	18	31	円	2CGr
9	23	23	27	円	2BGr	25	12	19	16	楕円	2CGr
10a	[24]	34	24	円	2BGr, 10bを切る	26	24	30	26	楕円	2CGr
10b	[34]	42	16	楕円	2BGr, 10aに切られる	27	21	22	26	円	2CGr
11	27	30	32	円	2BGr, 10bを切る	28	18	20	20	円	2CGr
12	36	38	39	円	2BGr	29	21	29	21	楕円	2CGr
13a	23	25	31	円	2BGr、新旧不明	30	26	32	47	楕円	2CGr
13b	27	27	42	円	2BGr、新旧不明	31	30	32	17	円	2CGr
14	22	23	22	円	1AGr						

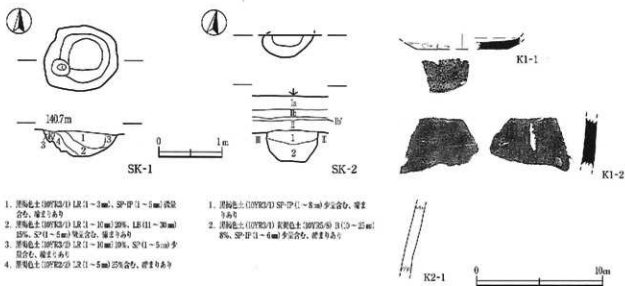
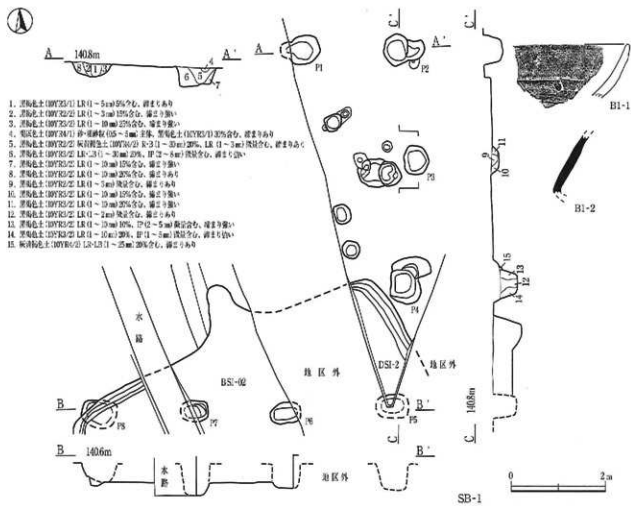
3. 土坑

土坑は2基確認し、1基は北半部が調査区外に延びる。

SK-1

遺構（第10図、図版5）

調査区の北西部、2A・B区に跨って所在する。北東約1.3mにSK-2、西約2mにSB-1が隣接する。南西に後世の小穴が重複する他に重複関係はない。



第10图 SB-1·出土遺物、SK-1·2·出土遺物

平面形・規模は、開口部が東西長 108cm、南北長 103cmのほぼ円形。深さ約 40cmで、壁は外傾する。底面は、東西長 52cm、南北長 50cmでほぼ同形。

埋積土は 4層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物（第 6 図、第 6 表）

埋積土中より土師器、須恵器の小片が出土し、須恵器坏（1）・甕（2）を図示した。

SK-2

遺構（第 10 図、図版 5）

調査区の中央部北端、2B 区に位置し、北半部は調査区外に所在する。南東約 25 m に SI-1、南西約 12 m に SK-1 が隣接する。重複関係はない。

前記の状況により平面形・規模は明確にし難いが、開口部は現存東西長 76cm、同南北長 35cmで、本来は径 80cm程の円形と推定される。深さ約 50cmで、壁はやや外傾する。底面は、現存東西長 48cm、同南北長 18cm、ほぼ同形で平坦であった。

埋積土は 2層に分けられ、人為的埋没と考えられる。

遺物（第 6 図、第 6 表）

中世土師質土器土鍋（1）の体部片 1 点のみの出土である。

第 6 表 SK-1・2 出土遺物観察表

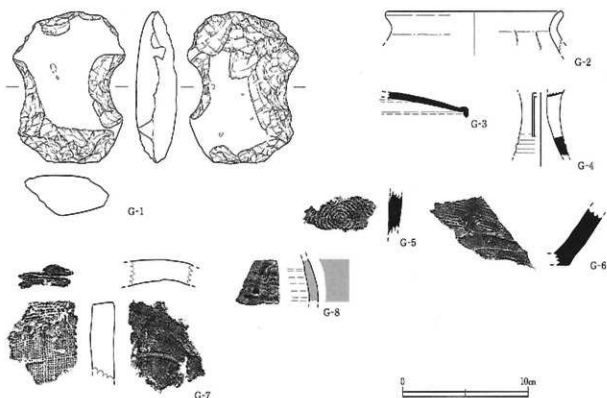
（ ）推定値 [] 現存値

No	種別	大きさ(cm)	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	備 考	
	器種	口径・器高・底径					
K1-1	須恵器 坏	口径	体・底部 断片	ロクロ整形、体部外面の下端へラ削り、底部外面へラ削り	胎土 焼成 色調 普通 灰色 (N6/0)	埋積土	
		器高					—
K1-2	須恵器 甕	口径	体部断片	ロクロ整形、叩き目・歯状痕認められず	胎土 砂粒混、海極骨針(短)多く含む 普通 色調 にぶい赤褐色 (2.5YR4/4)	埋積土 南郡須産?	
		器高					—
		底径					
K2-1	中世土師質土器 土鍋?	口径	体部断片	輪削み、内面横ナデ、外面付着物で不詳	胎土 焼成 色調 普通 内 赤褐色 (5YR4/6) 外 黒色 (10YR2/1)	埋積土 外面全体に煤付着	
		器高					—
		底径					

4. 調査区内出土遺物（第 11 図、図版 7、第 7 表）

今次調査区は埋没谷に近いことから過去の調査区に比べると現地表面から遺構確認面まで深く、旧耕作土や黒褐色土が厚く堆積していたが、遺物の包含量は少なかった。これらの中から、遺跡の特徴を示すと思われる遺物を図示した。

遺物は縄文時代の石器（G-1）、古墳時代～平安時代の土師器（G-2）、須恵器（G-3～6）、灰軸陶器（G-8）、瓦（G-7）などが見られた。なお、B・C区で一定量見られた中・近世の遺物はSK-2出土の 1 点のみであった。

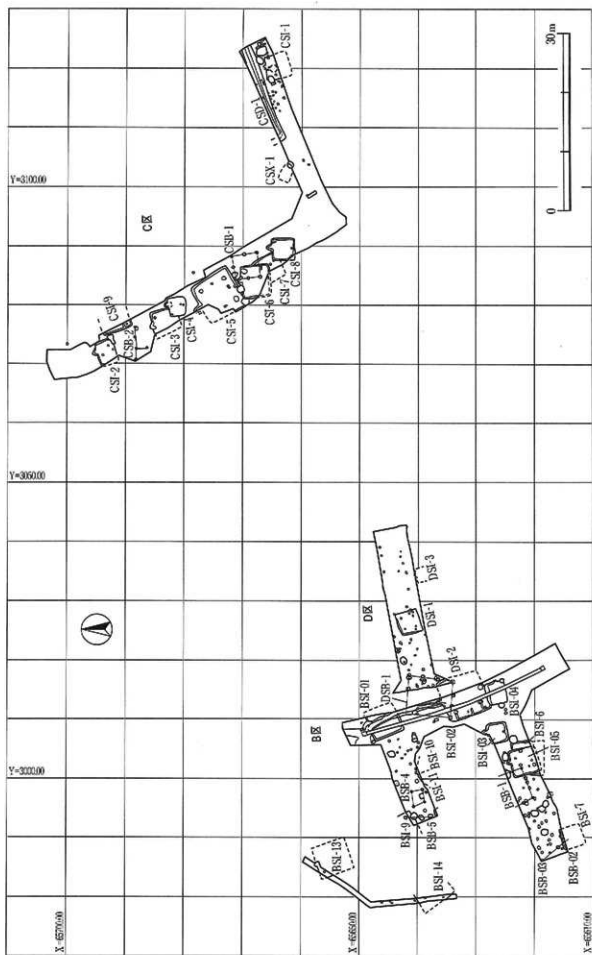


第11図 調査区内出土遺物

第7表 調査区内出土遺物観察表

()推定値 []現存値

No.	種別 器種	大きさ(cm) 口径・高さ・底径	遺存度	整形・手法等	胎土・焼成・色調	備考
G-1	石器 打製石斧	長さ 121 最大幅 89 最小幅 69 重量 418g	完形	分銅型、両面に自然面をのこす	胎土 焼成 色調 — — —	2B区包含層 安山岩製
G-2	土師器 類	口径 14.4 器高 — 底径 —	口辺部断片	輪ねみ、口辺部内・外面横ナデ仕上げ、体部内面ヘラナデ	胎土 焼成 色調 砂粒混、白色砂粒目立つ 普通 内 灰黄褐色 (10YR4/2) 外 灰黄褐色 (10YR5/2)	1A区包含層 二次被熱で一部 器面荒れる
G-3	須恵器 蓋	口径 — 器高 — 底径 —	口辺・体部 断片	ロクロ整形、甲の内側へう削り	胎土 焼成 色調 砂粒混、白色砂粒目立つ 普通 内 黄灰色 (2.5Y6/1)、灰白色 (N7/0) 外 灰色 (N6/0)	2A区包含層 SB-1・P1出土の 破片と同一器 体、内面外寄りに 輝灰を認める
G-4	須恵器 高坏	口径 — 器高 [5.1] 底径 —	脚部断片	ロクロ整形、脚部の上方部で長さ3cm程の長方形の透かし孔を三方より穿つ、下位に2条の沈線が認められ、上・下段の透かし孔と判断される	胎土 焼成 色調 粗砂粒混 良好 灰色 (N5/0)、一部暗灰色 (N3/0)の火色を認める	1A区包含層
G-5	須恵器 類	口径 — 器高 — 底径 —	体部断片	ロクロ整形、外面に同心円文の当具痕、内面ナデ	胎土 焼成 色調 砂粒混 あまい(二次被熱) 内 橙色 (2.5YR6/8) 外 赤褐色 (2.5YR4/6)	2C区包含層 常陸産? 著しい 二次被熱で変色 ・変質しもらい
G-6	須恵器 類	口径 — 器高 — 底径 —	体・底部 断片	ロクロ整形、体部外面平行叩き、下端へう削り、体部内面無文当具痕、底部外面に焼台状の付着物を認める	胎土 焼成 色調 砂粒混 普通 内 褐灰色 (10YR6/1) 外 灰色 (N4/0)	2A区包含層
G-7	瓦 男瓦	長さ [7.2] 幅 [6.1] 厚さ [1.6~1.9]	断片	凸面へう削り、凹面着目、小口一面化整、凹面小口寄りに糸切り痕	胎土 焼成 色調 粗砂粒混 普通 凸面 灰黄褐色 (10YR5/2) 凹面 褐灰色 (10YR5/1)	調査区内 宇都宮産
G-8	灰輪陶器 瓶	口径 — 器高 — 底径 —	体部断片	ロクロ整形、外面全体に灰オリーブ色の釉、部分的に釉の流れを認める、内面のロクロ目密	胎土 焼成 色調 精良 良好 内 灰白色 (2.5Y7/1) 外 灰オリーブ (7.5Y5/2)	1A区包含層 猿投産?



第 12 图 B·C·D 地区详配置图

Ⅲ 総括

北の前遺跡は、南北約 350 m、東西約 150 m で 50,000 m 程の範囲に及ぶ広大な遺跡と推定され、今次調査区はその南端にあたる。既に北半部の 26,000 m 程は、宇都宮環状線及び宇都宮北道路の建設に伴い、平成 3～6 年にかけて（財）とちぎ生涯学習文化財埋蔵文化財センター（当時）によって発掘調査が実施され、その成果が公開されている（文献 8）。これによれば、古墳時代後期から平安時代にわたる堅穴住居跡 88 軒、掘立柱建物跡 15 棟の他、中・近世の溝跡、掘立柱建物跡、地下式坑、井戸跡、土坑など膨大な数の遺構が確認された。さらに、この調査区（以下北半部の調査区）の南東に接する地点で集合住宅の建設に伴い、平成 7 年に市教委が行った調査では、奈良・平安時代の堅穴住居跡 3 軒の他、多数の中・近世の遺構が調査された（市教委 A 区、文献 5）。

遺跡南端部における調査はいずれも宅地造成に伴うもので、試掘調査で遺構が確認された道路部分に限定されたものであることから、それぞれ 180～500 m と小規模なものであるが、今次で 3 回目（市教委 B～D 区、文献 13・14）となる。調査面積の合計が約 1,200 m² となり、確認された堅穴住居跡は部分的なものが多いもの計 23 軒、掘立柱建物跡計 8 棟の他、古代の土坑、中・近世の溝跡、地下式坑などがある。しかし、今次調査区は約 200 m² と小規模で、確認された堅穴住居跡も部分的なものも含め僅かに 3 軒という状態である。したがってここでは、過去の調査成果も踏まえつつ総括する。

1. 土地利用の変遷

縄文時代 今次調査区では遺構の確認はなかったものの、打製石斧が 1 点出土した。近隣の過去の調査でも遺構の確認はなかったが、少量の土器、石器が出土している。明確な痕跡は残されていないが、何らかの土地利用の存在を推察し得る。なお、前述の北半部の調査でも遺構は確認されていないが、早期～晩期にわたる遺物が出土している。

弥生時代 今次調査区及び近隣の調査区でも該期の遺構・遺物ともに確認されていない。南に隣接する前田遺跡（文献 2）も同様である。しかし北半部の調査区では遺構は確認されなかったものの、遺物の出土は認められた。

古墳時代 今次調査区内では SI-1・2 が該期の遺構であるが、SI-2 は B 区の SI-02 の一部であることが判明した。今次調査区と近隣の調査区で時期を推定し得る計 21 軒のうち古墳時代と考えられるものは 13 軒と半数以上を占める。北半部の調査区では 6 世紀末葉より住居跡が認められるが、南隣の前田遺跡は 7 世紀中葉以降からとされる。したがって、北の前遺跡の集落が先行して営まれるが、前田遺跡に集落が営まれる 7 世紀後葉から 8 世紀初めは該期の住居が減少するようである。

奈良・平安時代 今次調査区における該期の遺構は SB-1 と SK-1 のみである。SB-1 は調査区内では当初北辺 1 間、東辺 2 間の確認に留まっていたが、B 区の図面と合成の結果、B 区 SI-02 内に南辺が確認され、3×3 間の建物跡を想定するに至った。

近隣の調査区では奈良時代の住居跡が 3 軒、平安時代の住居跡が 5 軒確認されている。8 世紀前葉には前田遺跡で 21 軒、北の前遺跡（北半部の調査区）で 11 軒と、ともに前後の時期とは格段の増加を見せる。しかし、8 世紀全般で比較すると、前田遺跡では全 161 軒中 62 軒（約 39%）、北の前遺跡（北半部）では 88 軒中 19 軒（約 22%）と確認数とともにそれぞれの全体に占める割合も大きな差が生じている。また、両集

落跡における違いとして堅穴住居跡に対し掘立柱建物跡の占める割合が上げられる。単純比較となるが、前田遺跡では堅穴 161 軒に対し掘立柱は 98 棟(約 61%)、北の前遺跡では堅穴 88 軒に対し 15 棟(約 17%)となる。掘立柱の比較については、中・近世の遺構が濃密に重複する北の前遺跡とこれがなかった前田遺跡を単純に比較するのは早計かもしれないが、隣接する集落跡における堅穴住居跡の時期的な増減の片寄りとともに掘立柱建物の保有率はそれぞれの集落の性格を考える上で興味深い。

前田遺跡の報告書では、集落内の住居跡より多数の瓦が出土し、瓦窯の操業時に堅穴の増加を見ることから、集落の南方で行われた瓦生産との関係をも想定している。北の前遺跡でも北半部の調査区や近隣の調査区より瓦片が多く出土しているものの、こちらは瓦生産を終えた後に持ち込まれたものと捉えられている。

平安時代の 9 世紀以降も、それぞれ堅穴の減少はあるものの集落が断続され、北の前遺跡では 10 世紀代、前田遺跡では 11 世紀代に堅穴が消えるようである。

中・近世 今次調査区でこの時期の遺構は SK-2 のみ、遺物もここから出土した中世土師質土器 1 片であった。西隣の B 区では 12 世紀代と考えられる中国福建窯の白磁碗や国産の炆器などの他 15 世紀以降と思われる中世土師質土器皿、土鍋などが出土したものの、遺構は明確にできなかった。東方の C 区においては、溝跡や地下式坑、土坑、小穴群が確認され、16 世紀後葉から 17 世紀前葉を中心とする中世土器質土器皿、土鍋、磁石、炆器などが出土した。該期の遺構については前述の通り北半部の調査区において濃密な分布(第 2 図)を示しており、南半部は分布が疎になると考えられる。北半部においては 16 世紀後葉から 17 世紀前葉の遺構・遺物が主体を占めるものの、15 世紀後葉以降のものも見られるようである。調査報告書では、溝に囲まれた区画内に建物を配置した「開発領主の屋敷」的なものと推定する。また、南に隣接する前田遺跡においては該期の遺構・遺物が認められないことから、「前田」の地名が示すように水田として利用されていた可能性を推測している(文献 8)。なお、本遺跡の中・近世の遺構・遺物は 15 世紀後葉から 17 世紀前葉が中心と見られるものの、B 区における 12 世紀代の遺物の存在から、南西部に古い段階の遺構が存在する可能性も全くは否定できないであろう。

2. 特徴ある遺構

今次調査区で確認した堅穴住居跡は 3 軒であるが、全体を調査し得たのは SI-1 が 1 軒だけで、SI-2 は B 区 SI-02 の北東隅、SI-3 はカマドの煙道先端のみという状況である。

SI-1 は一辺 3.7 ~ 3.9 m の方形で、東辺の南寄りにカマドが設けられていた。確認当初は堅穴の規模やカマドの位置などから歴史時代の住居跡かと思われたが、出土遺物から 7 世紀中葉の住居跡と判断された。本跡は床面から埋積土中に多量の炭化材や焼土が遺存し、火災住居と考えられる。炭化材は径 10cm 程の丸太状のものが多く、屋根の小屋組み材と見られるが、所々に屋根材と思われる茅状のものも認められた。着手時には遺物が少なく、移転に伴う廃材の処理跡かと思われたが、カマド脇の南壁沿いに完形の土師器杯や飯、完形であったと思われる大型の鉢が並び、北東の壁際からも完形の杯が出土したことから居住中の火災と判断した。近隣の調査区では、B 区 SI-01、C 区 SI-7 など少量の炭化材や焼土が出土したものはあるが、明確な火災の状況を示すのは本跡のみである。

なお、今次調査区と近隣の調査区においてカマドが確認された 18 軒のうち、東にカマドが設けられていたのは僅かに 2 軒である。もう 1 軒は、本跡の南西約 13 m に所在する B 区 SI-04 で、南北長 3.1 ~ 3.4 m、東西長 3.4 ~ 3.7 m の不整形、東辺南寄りにカマドが設けられていた。この住居跡は北側に拡張された

考えられ、U字溝に切られていて断定は出来ないが当初は北にカマドがあったと推定される。したがって、北から東へ移設されたと推察される。

また、北半部の調査区では、移設の2軒を含め計8軒の東カマドの住居跡が見られた。時期的には7世紀前葉から10世紀前葉と幅広いが、7世紀前葉から8世紀前葉に多いようである。

調査区の南西隅に部分的に確認されたSI-2は、今回の試掘トレンチ1の西端で東壁の一部が確認され、B区SI-02の一部と推定されていた。B区の図面と合成の結果それが確認された。南北長は7.65mと確認されていたが、東西長は7.4m程と判明した。また南西隅が直角となるのに対し、北西隅は丸味を帯びることから疑問に感じていたが、北東隅も丸味を帯びており、北と南で異なるものと考えられる。これは、下記のカマドの改造に関連する可能性が推察される。この住居跡は、4本主柱と考えられ、西側では3条の間仕切溝も確認された。カマドは北辺の中段に大きく壁を切り込み、灰白色粘土で構築されていた。また、焚口と推定される位置には、推定長95cm程の板状の凝灰岩が複数の破片となって遺存した。焚口部の廂として掛けわたしてあったと推定されるが、これを支える門柱状の石材が確認されず疑問を残す。なお、床面下の調査では、上記の石材より60cm程南寄り、旧カマドの焚口部の門柱の基部と見られるものを1対確認した。両者は約70cmの間隔をもって立てられ、約70cm奥には支脚の基部と考えられる石材も認められた。

今次調査区内には確認されなかったが、近隣の調査区においてカマドに凝灰岩の使用が見られたものは、上記の他にB区SI-06、C区SI-1・2・6・8などに見られた。C区SI-8は、カマドの焚口部に門柱状の石材が遺存し、カマドの左脇の床面には廂に用いられたと思われる板状の石材が遺存していた。これは、カマドの廃絶に伴う儀礼的破壊の結果と推察される。B区SI-06、C区SI-1・6は門柱部分に凝灰岩が遺存し、C区SI-2は袖部に土器類とともに補強材として埋め込まれていた。また、C区SI-6は焚口門柱部分のみならず、両側壁部にも切石が3枚ずつ掘方に接して据えられ、煙道となる奥壁中央のみが省かれていた。上部の構造は明確にし難いが、カマド内及び周辺にこれら以外の石材が認められないことから、他と同様に粘土を掛けわたしていた可能性が高い。焚口部の約20cm南に旧カマドの門柱の基部が遺存した。

当地は長岡石と呼ばれる凝灰岩の産出地で、東方約1.3kmには凝灰岩の露頭地があり、ここには県内最大級の横穴墓群である県指定史跡「長岡百穴古墳」が存在する。カマドに使用される凝灰岩は軽石質凝灰岩が主で、砂岩質凝灰岩も見られる。これらは近くの露頭地などより集落内に持ち込まれたものと推察される。

古代の遺構としては掘立柱建物跡のSB-1がある。調査区内においては、当初北辺1間、東辺2間程度の部分的な想定であったが、SI-2の全体図を作成の為B区の図面と合成の結果、東西3間、南北3間の建物跡を想定するに至った。しかし、平面形では問題ないが、断面図を作成すると、斜面上方の北辺と下方の南辺（いずれもB区SI-02内）で掘方底面の比高が30～50cmとなった。北辺と南辺の掘方底面の高さを統一しようとすると、南辺はいずれもSI-2の埋積土中となり、強度的な配慮からこのような状態になったと推察される。未調査部分もあり、側柱式か総柱式かは明確にし難い。

本営の上梓にあたり、調査に対してご理解を賜った有限会社おおいハウジングはじめ、調査及び報告書作成に対してご助力下さった機関ならび各位に感謝申し上げます。また、調査区の隣接地にお住まいの別井要三氏御一家には、B・C区の調査に際して種々ご高配を賜り、今回もご協力いただいた。同家の皆様に深謝申し上げます。

参考・引用文献

1. 川井正一 1988 「外面に同心円文叩きを有する須恵器について」『婆良岐考古10号』 婆良岐考古同人会
2. 梁木 誠・大塚雅之・今平利幸 1991 「前田遺跡」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第29集 宇都宮市教育委員会
3. 山口耕一 1944 「北関東地域における茨城産須恵器について(上) - 外面同心円叩き目を有する須恵器を中心に」『研究紀要第2号』 財団法人 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
4. 山本信夫 1995 「11. 貿易陶磁器(中世前期の貿易陶磁器)」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 榊真陽社
5. 富川 努 1996 「北の前遺跡」『宇都宮市文化財年報第12号』 宇都宮市教育委員会
6. 栃木県教育委員会 1997 「栃木県埋蔵文化財地図」
7. 宇都宮市教育委員会 1997 「宇都宮市埋蔵文化財地図」
8. 今平昌子 2003 「北の前遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告書第252集 栃木県教育委員会・鶴とちぎ生涯学習文化財団
9. 吉田 智 2007 「第7章第2節 3. 集落」『研究紀要第15号』 鶴とちぎ生涯学習文化財団センター
10. 池田敏宏 2007 「第7章第3節 2. 古代掬輪陶磁器」『研究紀要第15号』 (財)とちぎ生涯学習文化財団センター
11. 水野順敏・三輪孝幸 2010 「平出免の内台遺跡」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第75集 宇都宮市教育委員会
12. 大澤伸啓 2010 「41 榑崎寺跡」 榑同成社
13. 石川和弘・水野順敏 2013 「北の前遺跡(B区)」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第82集 宇都宮市教育委員会
14. 君島直人・水野順敏 2016 「北の前遺跡(C区)」 宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第96集 宇都宮市教育委員会



A. 調査前近景 (西より)



B. 調査区全景 (西より)



C. 調査区全景 (東より)



D. 調査区西部 (北より)



E. SI-1完掘 (西より)



F. SI-1掘方 (西より)

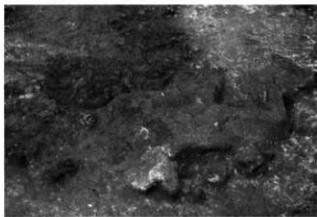


G. SI-1炭化物1 (西より)

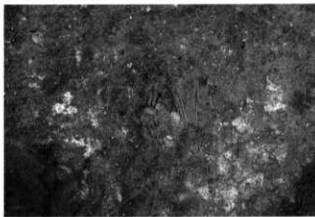


H. SI-1炭化物2 (西より)

図版 2



A. SI-1 中央部炭化物 (西より)



B. SI-1 炭化物近景 (東より)



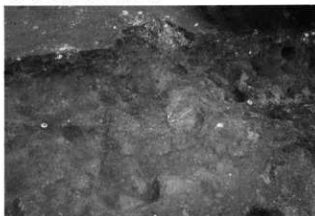
C. SI-1 南北土層 (西より)



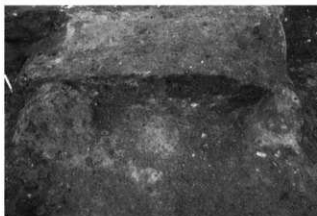
D. SI-1 東西土層 (南より)



E. SI-1 カマド完掘 (西より)



F. SI-1 カマド掘方 (西より)



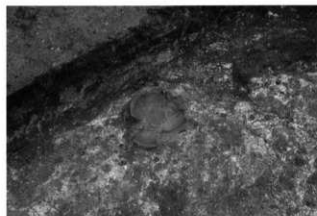
G. SI-1 カマド 南北土層 (西より)



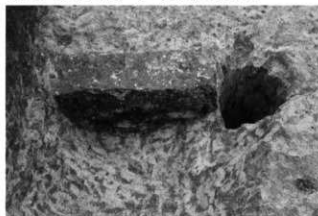
H. SI-1 カマド 東西土層 (南より)



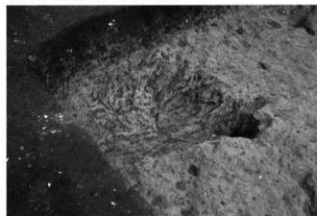
A. SI-1 遺物 (No2・6・5より) (東より)



B. SI-1 遺物No3 (南西より)



C. SI-1 北東隅床下土層 (北より)



D. SI-1 北東隅床下 (北西より)



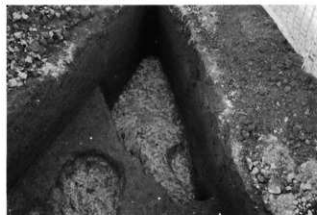
E. SI-2 完掘 (南より)



F. SI-2 完掘 (北より)



G. SI-2 掘方 (南より)



H. SI-2 掘方 (北より)

図版 4



A. SI-2 南北土層 (東より)



B. SI-3 カマド確認時 (北より)



C. SI-3 カマド南北土層 (西より)



D. SI-3 カマド東西土層 (北より)



E. SB-1 完掘 (北より)



F. SB-1 · P-1 土層 (南より)



G. SB-1 · P-2 土層 (南より)



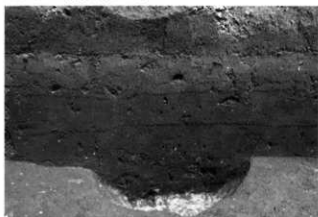
H. SB-1 · P-4 土層 (西より)



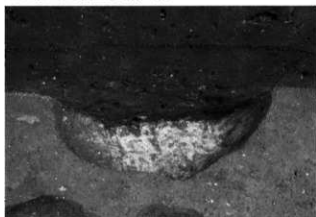
A. SK-1完掘 (東より)



B. SK-1東西土層 (南より)



C. SK-2東西土層 (南より)



D. SK-2完掘 (南より)



E. 基本土層1 (東より)



F. 基本土層2 (北より)



G. 基本土層3 (西より)



H. 作業風景 (西より)

図版 6



1-1



1-2



1-7



1-7R



1-3上



1-3



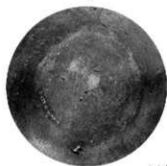
1-5



1-4



1-5底部



1-4底部



2-2



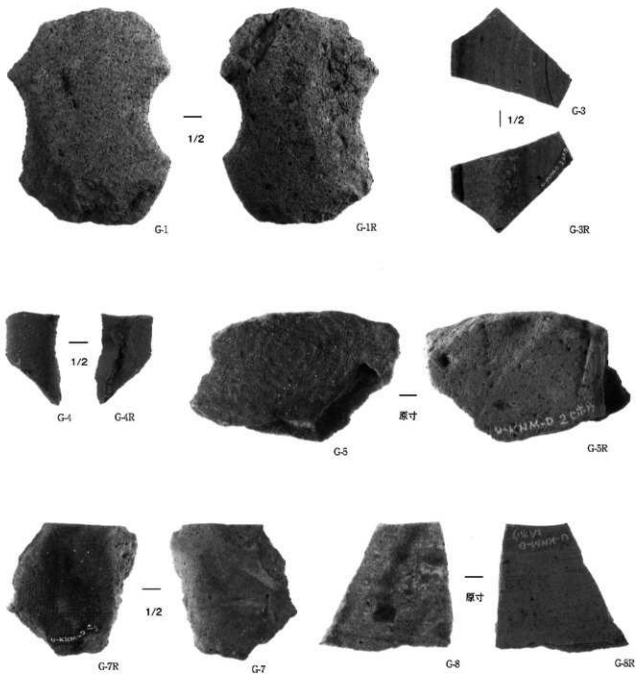
2-4



2-3



2-1底部



調査区内出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	きた まえいせきでいく							
書名	北の前遺跡 (D区)							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第97集							
編著者名	高橋 慧・水野順敏							
編集機関	株式会社 日本竊業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL 0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL 028-632-2764							
発行年月日	西暦2016 (平成28)年10月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きた まえいせき 北の前遺跡 (D区)	うつのみやし かみとまつちよう 宇都宮市上戸祭町 あびきた まえ 字北の前	9201	465	36° 35' 31"	139° 52' 3"	20160620 { 20160706	約180㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
北の前遺跡 (D区)	集落跡	・縄文時代 ・古墳～平安時代 ・中・近世	— ・ 竪穴住居跡 3軒 ・ 掘立柱建物跡 1棟 ・ 土坑 1基 ・ 土穴 31基 ・ 土坑 1基	・石器 ・土師器、須恵器、灰釉陶器、 瓦 ・土師質土器 (土簡)		・古墳時代後期後葉～ 平安時代にわたる密度 の高い集落跡である が、調査区付近は密度 が疎になる。中・近世 の遺構もほとんど見ら れない。掘込谷に近い 為と思われる。		
要 約	・古墳時代後期後半から平安時代にかけての集落跡で、調査区付近では住居跡の分布密度が疎になり、中・近世遺構もほとんど見られなくなる。							

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第97集

北の前遺跡 (D区)

発行年月日 2016 (平成28)年10月20日
 編 集 株式会社 日本竊業史研究所
 〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112
 TEL 0287-93-0711
 発 行 宇都宮市教育委員会文化課
 〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5
 TEL 028-632-2764
 印 刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
 〒321-0904 栃木県宇都宮市陽東5-9-21
 TEL 028-662-2511